

人権コラム 11月号

「六〇代から輝いて生きる」

岡田 耕治（大阪教育大学）

〈今日の映像を観て、「自分の人生一度きりやし、やりたいことをたくさん見つけてやろう！」と思いました。何歳になっても、常に何事においても好奇心を持って自分から学びを見つけて、楽しんでいきたいなと強く思いました。〉

今回のタイトルとした「六〇代から輝いて生きる」という映像を観た学生の感想である。この感想は二〇一九年一二月のものだが、今回再びこの映像を取り上げて授業を組み立てようと考えている。

新聞報道によると、全国的に教員の志願者の減少が続き、大阪府においても、把握できた範囲で過去最低となったという。教員養成大学の一員として、教職の魅力をどう伝えようかと考えているときに浮かんだのが、この映像を観た学生たちのまなざしだった。学校教育や児童生徒の現状や課題を理解するというアプローチだけでなく、どのように生きるかという人権教育の視点が、なくてはならないと思ったのである。

この映像を制作したのは、「あかね工房」のエンドウノリコさんで、これまでハラスメント、DV、性暴力被害にあった女性たちの声を届けてこられた。今回は、六〇代以上の女性六人を取り上げ、「人生を切り開く女性たち」をテーマに三〇分の作品に仕上げている。

六人の登場人物は、それぞれの輝きをもってインタビューに答えていく。ろう者が作る手話歌を学び、高校で手話歌を教えたり、高齢者施設やイベントなどで手話歌のボランティアをしているNさん。自宅を解放して文庫活動を行い、大人も子供もホッとできる場を作り、絵本の読み聞かせを行っているIさん。地域の博物館で研修を受け、その後ガイドボランティアとして活躍するSさん。

七〇歳で画廊を始め、若い人たちにも展示してもらうことにした画家のKさん。六九歳の時に夫がなくなり、できる仕事を探して介護職に出会ったヘルパーのSさん。DVの被害者から個人的に相談されたことがきっかけになり、DV支援やシェルターを運営しているMさん。

授業は、登場人物の印象的な言葉をメモしながら映像を視聴し、その後グループで語り合うという展開となった。ある学生はこうふり返った。〈今日の講義では、六〇歳以上の方たちの生の映像を通して深く考えることができた。私の家族や周りには後期高齢者が多く、「もう終活じゃ」と暗い意見を言う人が多いため、いつも心が苦しかった。しかし、今日のビデオの人たちは未来に夢があり、とても素敵だった。〉

学生たちは、コロナ禍の厳しい状況の中で学んできた。だからこそ、素敵な生き方との出会いが、自分自身の素敵さにつながっていく、そんな授業を提供したい。